

早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊 24号—1 二〇一六年九月

『諸国百物語』論

— 卷一ノ八「後妻^{うはななり}うちの事付タリ法花経^{ほけきやうくりき}の功力^{くりき}」に見る
「鉄輪説話」の影響を中心に—

塚 野 晶 子

はじめに

武蔵の国・秩父の里の^{おおやまはんのじよ}大山半之丞は、出産の折に妻を亡くし後妻を迎えた。ところが半之丞は夜な夜な、枕元に立つ前妻の亡霊に脅かされる。出会った旅僧から、その命が危ないことを告げられた半之丞は、件の旅僧に命を救う由を申し出られ、全身に経文を書かれた上で、前妻の塚の前に連れて行かれる。やがて夜になると塚の割れ目から前妻とその子の亡霊が現れる。子は半之丞の足の経文が消えた箇所を示し、「父の足がここにある」と言うが、前妻は「これは経木である」と恐れて立ち去る。しかし前妻の生前から彼女を「てうぶく」していた後妻は亡霊に殺されてしまう。——延宝五年（一六七七）に京都菊屋七郎兵衛から刊行された『諸国百物語』巻一ノ八「後妻^{うはななり}うちの事付タリ法花経^{ほけきやうくりき}の功力^{くりき}」のおおよそのあらすじである。

作品内容について「『曾呂利物語』に拠ったものが多かった」⁽¹⁾、「安

易な創作態度」「説話構成・展開は先行作に依存するところ大きいもの」⁽²⁾、「民話のパターンを踏んでいたたり、あるいは先行の仏教的な説話のパターンをひいていたたり、一見非常に素朴」⁽³⁾と、先学から言及を受けている『諸国百物語』の独自性は、さほど高いものではない。また先行研究それ自体もその数は決して多くはなく、「今日まで十分に注意を向けられてきた作品であるとは言えない」とされる⁽⁴⁾。

そこで本稿では、『諸国百物語』にさらなる考察を加えるため、本作品中高い収録数を占め、かつ重要な主題の一つとみなされる「後妻⁽⁵⁾うち」の話群の「話」「後妻うちの事付タリ法花経の功力」の読解を進めてゆく。「後妻うちの事付タリ法花経の功力」に関しては、『曾呂利物語』巻四ノ九「耳^{みみ}きれうんいちが事」の類話であるとの指摘が湯浅佳子氏によつてなされているが、全文を通読してみると、それだけではない種々の要素を含んでいるように思われ、再検討の必要性を感じた。本稿では先学の意見を踏まえつつ「後妻うちの事付タリ法花経の

功力」に影響を及ぼしたとみられる作品群を明らかにしてゆく。そしてこれらの作品群と「後妻うちの事付タリ法花経の功力」との比較を通じて、『諸国百物語』の新たな側面を見出すことを目的としたい。

一、「鉄輪説話」について

前述した「後妻うちの事付タリ法花経の功力」のあらすじに着目してみると、以下のような要素が物語の展開において重要であると考えられる。

- ・前妻が人外（女の物のけ）と化す。
- ・異能を有する人間（諸国あんぎやの僧）が夫（大山半之丞）に対し、女に起因する怪異ゆえに、命が危うい由を告げる。
- ・夫が異能を有する人間に対し、命が危うい由の心当たり（前妻との別離、後妻の存在）を打ち明ける。
- ・異能を有する人間が、夫の命を救う由を申し出る。
- ・前妻が「後妻うち」を行う（かつ、章題に「後妻うち」が冠せられているため、話の主題は「後妻うち」である）。
- ・前妻が夫への報復を断念する。

以上を考慮すると、これらを満たす作品として謡曲「鉄輪」が浮かんでくる。『屋代本 平家物語』等につく「剣巻」の貴船詣での妬婦譚を典拠とするこの「鉄輪」⁽⁷⁾は、後に「剣巻」とともにお伽草子「かなわ」の典拠となつてもいる。本稿ではこれらの「剣巻」⁽⁸⁾、「鉄輪」⁽⁹⁾、「かなわ」という一連の作品群を「鉄輪説話」と仮称することにする。その上で

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」に、これら「鉄輪説話」が影響を及ぼしている可能性を考えてゆく。また、寛文二年（一六六二）に刊行された『安倍晴明物語』の卷三ノ三「人形をいのりて命を転じ替たる事」は「鉄輪」を典拠とすべきか判断しかねるため、本稿における検証の対象からは省いた。⁽¹⁰⁾

二、「剣巻」との比較

本稿では初めに、謡曲「鉄輪」の典拠とされる『平家物語』「剣巻」を取り上げる。貴船詣での妬婦譚である「剣巻」は屋代本、百二十句本、田中本にしか見受けられないという先学からの指摘がある。⁽¹¹⁾ 多少の語句の異同はあるものの、内容は概ね一致しているので、本稿では屋代本をテキストとして用いた。

嵯峨天皇の御代、ある公卿の娘が嫉妬深さのために貴船明神に参詣し、生きたまま鬼となり、妬ましいと思う女を取り殺せるように祈願した。やがて明神からのお告げがあり、鬼となった娘は、妬ましいと思った女、己を弄んだ男、その縁者に至るまでを取り殺してゆく。そうした折、源頼光の四天王の一人・渡辺綱は、一条堀川の戻り橋のもとで件の鬼と遭遇し、髻を掴まれ連れ去られかけるが、名刀・鬚切にて鬼の腕を切り、難を逃れる。その顛末を頼光に告げたところ、陰陽師・晴明が呼ばれ、七日間の物忌みを命じられる。しかし物忌みが明けようという前日、伯母に化けた鬼が綱の許を訪れて腕を取り返し、破風を破って去ってゆく。鬼の腕を切り落としたため、鬚切は後

に鬼丸と名を改めた。——「剣巻」の貴船詣で妬婦譚の、おおよそのあらすじである。

本稿では「後妻うちの事付タリ法花経の功力」、「剣巻」の妬婦譚両話を、登場人物、本文、物語構造といった観点から比較を行った。なお、登場人物の対応関係の確認のため、【図表1】を作成したが、「剣巻」の妬婦譚には「後妻うちの事付タリ法花経の功力」の物語展開上、重要な役割を果たす三人——いにしへの妻（女の物のけ）、大山半之丞、諸国あんぎやの僧——に当該する人物が、或公卿ノ娘（鬼）、我ヲサメシ男、播磨守晴明として見出される。

また、物語構造上の共通点としては、以下の要素が認められた。

図表1

	前妻	夫	異能の人物	後妻
「後妻うちの事付タリ法花経の功力」	いにしへの妻 （女の物のけ）	大山半之丞	諸国あんぎ やの僧	後の妻
『平家物語』「剣巻」 （屋代本）	或公卿ノ娘 （鬼）	我ヲサメ シ男	播磨守晴明	妬ト思フ女
謡曲「鉄輪」	前ジテ 女 （先妻） 後ジテ 同人 （生霊）	ワキ連（後） 女の夫	ワキ（後） 陰陽師・晴 明	後妻
お伽草子「かなわ」	女はう （おに）	山田のさへ もんくにと き	あへのせい めい	うはなり

①女が人外と化す。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では前妻が「女の物のけ」に、「剣巻」の妬婦譚では娘が「鬼」に、それぞれ変貌を遂げている。

②「後妻うち」が行われる。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では前妻の亡霊が、生前から己を「てうぶく」していた後妻を、首を取って殺害している。また「剣巻」の妬婦譚では、鬼となった娘が「妬ト思フ女」を「其縁ノ者」もろともに取り殺している。

③男が殺害の対象となる。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では僧侶の「其方は女の物のけ付きてたゝりをなす人なり。御身のちをわらんことほどちかし」、前妻の「さてもなんぢが父をとりころさんとおもひしに、いづくへおち行きつらん。」という各々の言葉から、夫が前妻の殺害の対象となっている様子がわかる。「剣巻」の妬婦譚では鬼となった娘が「我ヲサメシ男」を取り殺している。

結果、「剣巻」の妬婦譚との共通点として、【登場人物、女の人外への変貌、「後妻うち」、男が殺害の対象】という要素が明らかとなったのである。しかしながら両話には、物語本文の類似性は見受けられなかった。

三、謡曲「鉄輪」との比較

ついで、本章段においては「後妻うちの事付タリ法花経の功力」と謡曲「鉄輪」との比較を行う。

夫に捨てられた先妻が、後妻の許へと通う男に報いを与えるため、貴船神社へと参詣をすると、神人から「ご神託によれば、鉄輪に火を灯して頭に頂き、顔に丹を塗り、赤い着物を着て怒る心を持てば願いがかなう」との告げを受ける。その言葉に喜んだ先妻の姿は、見る間に鬼へと変じてゆく。一方、夢見の悪い日々が続く男は、陰陽師・晴明の許へ出向く。晴明は男にその命が危ういことを告げ、それを救うべく祈念を行う。やがて頭に鉄輪を頂き、鬼となった姿で先妻の生霊が現れ、男への積年の恨みを述べ、後妻の形代である藁人形に咎を振り上げ打擲を行う。だが男を取り巻く神々の加護に気付き、復讐を断念して去ってゆく。——「鉄輪」の概要はこのようなものである。

以上をふまえ、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」と「鉄輪」における、登場人物の対応関係の確認を行った（【図表1】参照）。その結果、「鉄輪」には、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」の物語展開上重要な役割を果たす三人（いにしへの妻・女の物のけ、大山半之丞、諸国あんぎやの僧）に当該する人物が、女（先妻）・同人（生霊）、女の夫、陰陽師・晴明として見出された。なお、「後妻」の存在及び役割については後述する。

つぎに、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」、「鉄輪」の本文に着

目し、表現上の類似点が見出される箇所を考察を加える。【図表2】に示した比較の結果、僧侶・陰陽師といった異能の人間が、男が女に起因する怪異ゆえに命が危ういことを指摘する点（1）―①、男が己の命の危機の心当たりを打ち明け、そこに前妻との別れ、後妻を迎えるといった構図が見受けられる点（2）―②、男の話を聞いた僧侶・陰陽師が「やはりそうか」という由の、男が命を狙われる事情の一切を、最初から知っていたかのようなことを口にする点（3）―③、僧侶・陰陽師が男の命を救う由を申し出る点（4）―④等、これら両話には表現上の類似点が見出された。

これらの要素を考慮に入れつつ、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」「鉄輪」両話の物語構造における共通項に考察を加えた結果、以下の点が共通していることがわかる。

①女が人外と化す。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では前妻が「女の物のけ」に、「鉄輪」では本妻が「鬼」に、それぞれ変貌している。

②「後妻うち」が行われる。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では前述のように、前妻の亡霊が後妻の首を取る。「鉄輪」では咎を振り上げた本妻が、後妻（の形代）の髪を手に絡め、思い知れとばかりに打ち据えている。

③男が殺害の対象となる。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」においては「其方は女の

図表2

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」		謡曲「鉄輪」	お伽草子「かなわ」
諸国あんぎやの僧とをりあわせて、半之丞をみて、 「(1) 其方は女の物のけ付きてたゝりをなす人なり。 御身のちをわらんことほどちかし」と云ふ。		ワキあら不思議や、考へ申すに及ばず、 の恨みを深く蒙りたる人にてわたり候、殊に今夜の 中におん命も危く見え給ひて候、	ふしきやな、御身のことはつき、五をんのやうを聞 に、①これ女のうらみを、ふかく、きたる人にて、 はむへる、ことに、こんやの内に、御いのちもや、 あやうくみえさせ給ひひ、もしさやうの事はしひか さゑもん聞て、いろをへんし、申されけるは、けに 思ひあはせたり、何をかくしひへき、②此あひた、 ほんつまを、りへつつかまつり、あたらしきつまを、 かたらひ侍るか
扱そのうへにて半之丞物がたりしけるは、「かやう の事申すは御はづかしく候へども、(2) さんぬる比、 わが妻産にてあひはてけるが、此ごろ又あたらしき 妻をよびむかへけるに、(中略)」		ワキ連さん候ふなにか隠し申すべき、②われ本妻 を離別して、新しき妻を語らひて候ふが、もしさや うのことにてもや候ふらん	③けに、さやうにみえ給ひてひ、
(3) さればこそ、はじめよりさやうの物のけ有る べしとみへたり。		ワキ③げにさやうに見えて候、	④此上は、なにとそきねんして、御いのちを、てん しかへて参らせむ、
(4) さらば封じてまいらせん		ワキ④この上はなにとまして、おん命を轉じ替へて 参らせうずるにて候、	

物のけ付きてたゝりをなす人なり。御身のちをわらんことほどちかし、「さてもなんぢが父をとりころさんとおもひしに、いづくへおち行きつらん。」という言葉から、夫が殺害の対象となっている様うかがわれる。「鉄輪」では晴明の「これは女の恨みを深く蒙りたる人にてわたり候、殊に今夜の中におん命も危く見え給ひて候」「おん命も今夜に極まつて候ふ」、捨てられた本妻の「命は今宵ぞ、痛はしや。」「徒し男を取つて行かん」という各々の言葉から、男の命が狙われている様が見受けられる。これらの共通点とは別に、「剣巻」の妬婦譚では見られなかった「鉄

輪」独自の新たな共通点が認められる。
④男の夢に前妻が現れ男を脅かす。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では夫の「此程夢ともなくうつゝともなく、夜なく枕もとにきたりておどろかし候ふ」という言葉からうかがわれるように、前妻の亡霊が夢うつつの境にいる男を脅かしている。また「鉄輪」では「われこの間うち統き夢見悪しく候ふほどに、晴明のもとへ立ち越え、夢の様をも占なはせ申さばやと存じ候」という言葉に見るように、男の夢見の悪さが、彼を晴明の許へ赴かせる原因となっている。

⑤男と異能を有する人物（僧・陰陽師）との会話内容。

【図表2】において「後妻うちの事付タリ法花経の功力」、「鉄輪」の本文の類似点に言及した際に明らかとなった、

・異能の人物が、男が女に起因する怪異のために命が危うい由を指摘する。

・男が前妻の怨嗟を蒙る心当たり（前妻との別離、後妻の存在）を語る。

・異能の人物が、男の心当たりを裏付け、命を救う由を申し出る。という一連の流れが共通している。

⑥異能の人物が、男の命を救うための呪法を行う。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では前妻の亡霊を封じるべく、僧侶が夫の体に法花経を書く。「鉄輪」では晴明が男の命を「茅の人形」に転じ替え、神格の確かな「三十番神」を発動させる。

⑦異能の人物が呪法の支度を調えた後、人外の前妻が出現する。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では体に法花経を書かれ、前妻の塚の前に連れて行かれた夫の許に亡霊が出現する。また「鉄輪」では、鬼となった本妻が現れ、男の形代である「茅の人形」を見据える。

⑧異能の人物の呪法により、前妻が夫への復讐を諦める。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では僧侶の書いた法花経により、夫が「経木」としか見えない前妻が「さてもなんぢが父

をとところさんとおもひしに、いづくへおち行きつらん。今は是れまでなり。」と言ひ、「後妻うち」を果たしたことへの嬉しさを述べた後、塚の内に消えてゆく。「鉄輪」では晴明の動員した「三十番神」により、怨霊の類である本妻の生霊の力が封じられる。

小田幸子氏は「鉄輪」の上演記録が、元和元年（一六一五）から寛文七年（一六六二）までの約五十年間は見当たらないこと、「鉄輪」が「江戸期には、さほどの人気曲ではなかったと思われる。」ことを指摘している⁽¹²⁾。それに従えば、「鉄輪」を「後妻うちの事付タリ法花経の功力」の典拠とすることには無理が生じる。

しかしながら、以上の「後妻うちの事付タリ法花経の功力」と「鉄輪」の比較結果を合わせてみると、【登場人物、本文、女の人外への変貌、「後妻うち」、男が殺害の対象、男の夢への影響、異能の人物の呪法、呪法が調った後の前妻の出現、前妻の夫への復讐の断念】という共通点が明らかとなった。さらに【本文、男の夢への影響、異能の人物の呪法、呪法が調った後の前妻の出現、前妻の夫への復讐の断念】という点は「剣巻」の妬婦譚には見られなかった、「鉄輪」独自のものである。よって、「鉄輪」は「剣巻」の妬婦譚に比し、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」により類似していると言えよう。

これらの事柄から、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」に「鉄輪」の影響を認めることの有効性は示されたかと思われる。

四、お伽草子「かなわ」との比較

ついで、本章段では「後妻うちの事付タリ法花経の功力」と、前述の謡曲「鉄輪」ならびに「剣巻」の一部を典拠とする、お伽草子「かなわ」との比較を行う。――以下にその梗概を記す。

一条院の御代、源頼光とその四天王、安倍晴明のために世は良く治まっていたが、一つの不思議な事があった。下京樋口の辺りに住む山田左衛門国時の女房は公卿の娘で、夫婦仲は良好であったが、やがて国時が余所に女をつくったため、妬心にかられた女房は貴船神社に丑の刻参りをする。七日目の満願に巫を介してお告げを受け、教えられた通りの姿にこしらえ、更に宇治川に三七日浸ることで、その身は望み通り、生きながら鬼と化した。一方、夢見の悪い国時が晴明の許を訪れたところ、晴明は国時にその命が危ういことを告げ、それを救うべく祈念を行う。そして鬼と化した女房は国時の命を取るべく都へ向かう（以上、上巻）。

鬼は国時の枕元まで来たが、三十番神がいたために殺害という目的を果たせず、その後は洛中に夜な夜な出没して人を襲った。鬼退治の勅命を受けた頼光は、渡辺綱、坂田金時に、鬚切、膝丸の二名刀を貸し与え、その日のうちに退治に出す。太刀の威徳に恐れをなした鬼は宇治川に逃げ、「今後は禍を止めるので弔って欲しい。今よりは王城鎮護の鎮守となる」と言い、水中に消える。頼光から顚末を聞いた帝が供養を行わせると、御前近い女房の夢

に女房が現れ、社を立ててくれるよう告げた。晴明の占いを経て建立した社が、宇治の橋姫社である（以上、下巻）。

以上をふまえ、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」と「かなわ」における、登場人物の対応関係の確認を行ったところ（【図表1】参照）、「かなわ」には、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」の物語展開上重要な役割を果たす三人（いにしへの妻・女の物のけ、大山半之丞、諸国あんぎやの僧）に当該する人物が、女はう（おに）、山田のさへもんにとき、あへのせいめいとして見出された。

続いて、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」、「かなわ」の本文に着目し、表現上の類似点が見出される箇所を考察を加えた（【図表2】参照）。その結果、異能の人間が、男が女に起因する怪異ゆえに命が危ういことを指摘する点（1）―①、男が己の命の危機の心当たりを打ち明け、そこに前妻との別れ、後妻を迎えるといった構図が見受けられる点（2）―②、男の話聞いた異能の人物が「やはりそうか」という由の、男が命を狙われる事情の一切を、最初から知っていたかのようなことを口にする点（3）―③、異能の人物が男の命を救う由を申し出る点（4）―④等、これら両話には表現上の類似点が見出された。

本章段ではこれらの要素を考慮に入れつつ、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」「かなわ」両話の物語構造における共通項に考察を加えた。その結果、以下の点が共通している様が判明した。

①女が人外と化す。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では前妻が「女の物のけ」に、「かなわ」では女房が「おに」に、それぞれ変貌している。

②男が殺害の対象となる。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では前述の、僧、前妻の亡霊の言葉から、男が命を狙われている様子がうかがわれる。「かなわ」においては女房の「にくきおとこを取ころし、うらみをはらさん」「いてく、さらはいのちを、とらん」という言葉、前述した晴明の「これ女のうらみを、ふかく、きたる人にて、はむへる、ことに、こんやの内に、御いのちもや、あやうくみえさせ給ひひ」「はや御いのちも、こんやに、きはまり給ひてひ也」という言葉等から、女房の怨嗟により国時の命が危機に瀕している様子が認められる。

③男の夢に前妻が現れ男を脅かす。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では前述のように、前妻の亡霊が夢うつつの境にいる夫を脅かしている。「かなわ」においては女房の殺意の対象となった国時が「か、るうきめに、あふへきゆへにや、打つ、き、ゆめみあし、とて」という状態に陥り、晴明の許を訪ねるといふ展開になっている。

④男と異能の人物との会話内容。

前述の「後妻うちの事付タリ法花経の功力」、「かなわ」の本文の類似点に言及した際に明らかとなった、

- ・異能の人物が、男が女に起因する怪異のために命が危うい由を

指摘する。

- ・男が前妻の怨嗟を蒙る心当たり（前妻との別離、後妻の存在）を語る。

- ・異能の人物が、男の心当たりを裏付け、命を救う由を申し出る。という一連の流れが共通している。

⑤異能の人物が、男の命を救うための呪法を行う。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では前述のように、僧侶が夫の体に法花経を書く。「かなわ」では晴明が国時の命を「へちの人きやう」に転じ、「みやうわう」「卍はんしん」を祈念により発動させる。

⑥異能の人物が呪法の支度を調えた後、人外の前妻が出現する。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では法花経を書かれ、前妻の塚の前に連れて行かれた夫の許に亡霊が出現する。「かなわ」では晴明が「みやうわう」の示現を認めた後に、鬼と化した女房が国時の枕元に立つ。

⑦異能の人物の呪法により、前妻が夫への復讐を諦める。

「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では法花経の功力により、前妻の亡霊が夫の殺害を断念する。「かなわ」では晴明が発動させた「卍はんしん」により、鬼となった女房はその力を封じられる。

以上、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」と「かなわ」の比較の結果を合わせてみると、【登場人物、本文、女の人外への変貌、男が

殺害の対象、男の夢への影響、異能の人物の呪法、呪法が調った後の前妻の出現、前妻の夫への復讐の断念」という点で共通している様うかがわれた。

しかしながら、「かなわ」においては、女房が「しもとをふりあけ、かしらのかみを、手にかまひて」打ち据えようとしたのは、「鉄輪」に見るような後妻の形代ではなく、「あたしおとこ」である国時である。すなわち「かなわ」においては「後妻うちの事付タリ法花経の功力」の主要素の一つである「後妻うち」が行われていない為、両話の類似性は「鉄輪」と「後妻うちの事付タリ法花経の功力」のそれに比し、やや希薄であると言える。また、藤井隆氏は「かなわ」の現存伝本が元禄頃書写の藤井蔵本のみであることを述べている為、本編の流布がそれほど広範囲であったとは考えられない。これらを考慮に入れると、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」が「かなわ」を直接的に摂取したかは判断しかねるものがあると言えよう。

まとめに

以上、本稿においては『諸国百物語』巻一ノ八「後妻うちの事付タリ法花経の功力」と、一連の「鉄輪説話」——『平家物語』「剣巻」、謡曲「鉄輪」、お伽草子「かなわ」——との比較を行った。

結果、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」がこれらの作品群を直接的に典拠として摂取したという論証は得られなかったものの、本話とこれらの作品群は登場人物の対応関係、本文の表現、物語展開上の

要素等の類似点が多く見受けられた。特に謡曲「鉄輪」と近接している。すなわち「後妻うちの事付タリ法花経の功力」には「鉄輪説話」の面影が色濃く認められるのである。

その一方で、これらの「鉄輪説話」の作品群と「後妻うちの事付タリ法花経の功力」とを比較した際、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」独特の設定もいくつか見受けられた。

先ず「後妻うちの事付タリ法花経の功力」の主題は、前述のように「後妻うち」である。しかしながら、この「後妻うち」は、「かなわ」には認められず、「剣巻」では「後妻うち」は行われているものの、「妬ト思フ女」のみならず「我ヲスサメシ男」も同時に前妻に殺害されている。

また「鉄輪」においては、

- ・シテ恨めしやおん身と契りしその時は、玉椿の八千代、ふた葉の松の末かけて、変はらじとこそ思ひしに、などしも捨ては果て給ふぞや、あら恨めしや。

- ・シテ捨てられて、地捨てられて、思ふ思ひの、涙に沈み、人を恨み、シテ夫を託ち、地ある時は恋しく、シテまたは恨めしく、地起きても寝ても、忘れぬ思ひの、因果は今ぞと、白雪の消えなん、命は今宵ぞ、痛はしや。

というくだりから見受けられるように、先妻の夫に対する種々の感情の吐露が認められる¹⁴。また、前述の小田幸子氏は「鉄輪」のシテは、後妻以上に夫に対して強い恨みと復讐心を抱いている」由を述べてい

る。⁽¹⁵⁾これら先学の指摘からは「鉄輪」の女が、夫に愛憎半ばする、それ故強烈な感情を抱いている様うかがわれる。

これに対し、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」には、前妻が夫に何らかの感情を打ち明ける箇所は見出されない。さらに「後妻うちの事付タリ法花経の功力」における、

「とてもなんぢが父をとりころさんとおもひしに、いづくへおち行きつらん。(1)今は是れまでなり。(2)年月のほんもうをとげたり。(3)われ生世いきよのうちより、此女われをてうぶくせしゆへに、われしゝてもほむらのたへがたかりしに、今かくいのちをとりたる事のうれしや」

という前妻の言葉からは、

(1) 前妻は夫の殺害を諦めることに、さほど口惜しさを抱いていない。

(2) 前妻の「ほんもう」は後妻の殺害である。

(3) 後妻に前妻の「てうぶく」という、前妻の恨みを蒙る理由があり、前妻は後妻の殺害に対し、喜びを表明している。

といった構図がうかがわれる。

これらのことを考慮に入れると、「後妻うちの事付タリ法花経の功力」の前妻は、夫以上に後妻に対して強烈な怨嗟を抱いている様が見られ、このような設定は前述した一連の「鉄輪説話」には見受けられないものである。

そして、一連の「鉄輪説話」の後妻が先妻の怨嗟の対象となったの

は、夫が彼女に心に移した為であり、後妻自身にさしたる個性は認められない。対する「後妻うちの事付タリ法花経の功力」における後妻は、夫を得たいがために前妻の「てうぶく」を行うという積極性を有した存在として位置づけられている。

また、「鉄輪」の女、「かなわ」の女房は共に、その本意であるところの夫殺害を果たし得ず、怨嗟と再度の襲来を表明して立ち去っている。一方で前述のように「後妻うちの事付タリ法花経の功力」の前妻は、「ほんもう」である「後妻うち」を成し遂げ、夜明けと共に墓中に消えている。「鉄輪説話」に比し、前妻の執念の凄まじさが強調されている様うかがわれる。

これらの事柄からは、登場人物、物語展開の構図、本文は従来の作品群のそれを踏襲しつつも、人物造形や物語の主題、結末等に変遷を加えるという、『諸国百物語』の新たな創作的側面が見出される。今後は、本稿では取り上げ得なかった『諸国百物語』の重要と目される主題や話群に焦点をあて、本作品のさらなる特質及び創作性に考察を加えてゆきたいと考える。

注1) 太刀川清氏「第二章 仮名草子の百物語」第一節「『百物語』と『諸国百物語』」(『近世怪異小説研究』、笠間書院、一九七九・十二)(初出:『諸国百物語』成立の背景)(『長野県短大紀要』第二十八号、一九七三・十二)

(2) 小澤江美子氏「延宝期の怪異小説考——『曾呂利物語』から『諸国百物語』へ」(『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第二号、一九九二・三)

(3) 高田衛氏、小松和彦氏、長島弘明氏〔鼎談〕江戸の怪異譚と西鶴」(高田衛氏他編『西鶴と浮世草子研究 特集・怪異』第二号、笠間書院、二〇〇七・十一)

(4) 古明地樹氏「怪異描写の鮮明度―『諸国百物語』にみる近世的怪談文芸への志向―」(『学芸古典文学』第八号、二〇一五・三)

(5) ここで先ず本稿における「後妻うち」の定義を述べる。桃裕行氏は「うはなり(後妻打)考」(『日本歴史』第三十五号、一九五一・四)において「後妻うち」が平安期の「下層階級に一般に行はれてゐた習俗」であつた由を指摘している。また文化八年(一一八一)の『烹糲の記』には、「後妻うち」が戦国時代にはルールが確立した民間習俗となつていた様が認められる。しかし寛文元年(一六六一)刊の『本朝女鑑』巻十二「うはなり妬を誡むる式 三」や、享保年間(一七一六―一七三六)に刊行されたとされる『女大学』等からは、近世期には女性の嫉妬や「うはなり妬」が容認されず、「後妻うち」は中古・中世に見られた習俗としての正当性を喪失してしまつた様子がうかがわれる。また、井上泰至氏は「吉備津の釜」――「後妻打ち」からの乖離――」(『上智大学国文学論集』第二十、一九八七・一)において山東京伝の『骨董集』の一節「か、れば近むかしの怪談草紙などに、うはなり打を生りやう死りやうのしわざとせるは、これらのうたひできてのちのつくり事なるべし。」を引き合いに出し、この一節が「先妻が霊となつて後妻に復讐する文学上のパターンとしての「後妻打ち」の嚆矢を『葉上』に求める文脈で語られている」由を指摘している。さらに小松和彦氏が「(鼎談)江戸の怪異譚と西鶴」(注3)前掲)において「典型的なうわなり打ち」と評する『諸国百物語』巻二ノ九「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」には、前妻の亡霊が後妻を殺害する様が書かれている。そして題名に「後妻うち」が冠せられる巻一ノ八「後妻うちの事付タリ法花経の功力」では、後妻を殺害する前妻の亡霊が、巻四ノ十四「下総の国平六左衛門が親の腫物の事」(目録の題名は「死霊の後妻うち付タリ法花経にて成仏の事」)では、夫の寵愛していた下女を殺す本妻が、巻五ノ十六「松ざか屋甚太夫が女ばううは

なりうちの事」では、後妻を取り殺す前妻の「しうしん」が、それぞれ書かれている。以上から本稿では「後妻うち」を、民間習俗としてのそれではなく、「前妻ないしは本妻の死霊・生霊による、後妻あるいは妾の抹殺・排除を意図した行為」と定義づける。そしてこの定義に該当する「後妻うち」の話は『諸国百物語』中に、巻一ノ八、巻二ノ九、巻三ノ七、巻四ノ一、巻四ノ十四、巻五ノ六、巻五ノ十四、巻五ノ十六の計八話が収録されており、その所収比率は八%を占めている。なお『諸国百物語』以前の怪異小説である片仮名本『因果物語』の「後妻うち」所収比率は三・二%、『曾呂利物語』の所収比率は二・四%、『宿直草』(『御伽物語』)の所収比率は二・九%であり、『奇異雑談集』、平仮名本『因果物語』、『伽婢子』には「後妻うち」の所収は見受けられない。さらに、前述のように題名に「後妻うち」が冠せられる話は、『諸国百物語』以前の近世怪異小説群には見出されない。以上から、『諸国百物語』における「後妻うち」の主題としての重要性がうかがわれる。湯浅佳子氏「『曾呂利物語』の類話」(『東京学芸大学紀要(人文社会科学系)』第六十集、二〇〇九・一)

(7) 吉海直人氏は「橋姫物語の史的考察―源氏物語背景論Ⅰ―」(『國學院大學大学院紀要(文学研究科)』第十三巻、一九八二・三)において、謡曲「鉄輪」が「平家物語」「剣巻」の流れを汲む由を指摘している。

(8) 吉海直人氏は「橋姫物語の史的考察―源氏物語背景論Ⅰ―」(注7)前掲)において、「かなわ」が「平家物語」と謡曲「かなわ」を合体し、末尾に橋姫社縁起を付加した形をとっている」由を指摘している。

(9) 小田幸子氏が「作品研究「鉄輪」」(『観世』第五十巻、一九八三・六)において用いた仮称。小田氏は「『平家物語』剣巻記載の宇治の橋姫にまつわる姉婦譚」(『屋代本・百二十句本・田中本』を指す際にこの仮称を用いていたが、本稿ではその範囲を広げ、「剣巻」から派生した貴船詣での姉婦譚に対しても、この呼称を用いた。

(10) 前述の小田幸子氏は「作品研究「鉄輪」」(注9)前掲)において「元和元年の上演(『能の留帳』を最後に、寛文七年宝生大夫の演能(『薪能番組』)までの五十年間、(鉄輪)の上演記録はみあたらない」と指

摘している。その為、「人形をいのりて命を転じ替たる事」が「鉄輪」を謡曲から直接摂取したか、他の文芸作品を間に挟んだかには研究の余地がある。

(11) 注(7)前掲 吉海直人氏「橋姫物語の史的考察―源氏物語背景論Ⅰ―」

(12) 注(9)前掲 小田幸子氏「作品研究「鉄輪」

(13) 藤井隆氏 第二編「(4)かなわ」(『中世古典の書誌学的研究 御伽草子編』、和泉書院、一九九六・五)

(14) 小野真代氏は「中世文学における妬婦譚について―女性の救済をめぐって―」(『駒澤大学大学院国文学論輯』、第三十二巻、二〇〇四・三)において「女」が「夫に捨てられた恨みと、そうかといって愛する夫を恨み切れない、未練の狭間に立つ苦しみを嘆く。」由を指摘している。

(15) 小田幸子氏「鉄輪」の夫」(『鍊仙』、第四五二巻、一九九七・四)

【附記】 本稿は二〇一六年度の昔話伝説研究会二月例会での発表に加筆・修正を加えた論文である。多くのご意見を頂戴したことに謝意を表したい。なお、本稿中の『諸国百物語』本文引用は高田衛氏・原道生氏編『叢書江戸文庫2 百物語怪談集成』(図書刊行会、一九八七・七)に、お伽草子「かなわ」は横山重氏・松本隆信氏編著『室町時代物語大成 第三』(岩波書店、一九七五・一)に、謡曲「鉄輪」は横道萬里雄氏・表章氏校注『日本古典文学大系41 謡曲集下』(岩波書店、一九六三・二)に拠る。